

追 悼

富山典彦教授は2020年5月10日急逝された。本号を追悼号とする次第である。

私たちヨーロッパ文化学科の同僚は、その二日前に先生から「入院します」とのメールを受けとったばかりだった。仰天を通り越し、言葉がない。後で、メールの翌日病院に向かう途上倒れられたとお聞きした。癌が進行していたとのこと。4月に学科会議でお目にかかったときには普段と変わらぬ富山先生であり、何の異変も感じられなかったのだが。無常を思い知ると言わざるを得ない。

本学のドイツ語ドイツ文学の大黒柱、学会の重鎮。亡くなられて思い知る存在の大きさ。そして何よりも、まとっておられた、颯爽としてやわらかな雰囲気。毎年、卒業生への祝辞では、ご自身の短歌を披露され、教室はなんともいえない雅びで長閑な空気に包まれるのだった。富山先生のおられる所にはいつも温かい光が射しているかのようだった。

コロナ禍のもと、様々な不如意に耐えた一年だった。そして富山先生との別れを惜しみ、多くの原稿が寄せられた。

追悼の文章の最初を飾るのは、ほかでもない、富山先生のお嬢様、侑美さんである。思い出せば、富山先生の奥様とお嬢様は、一号館の二階にかつてあったヨーロッパ文化学科の研究室によく立ち寄られたものだった。そのようにしてご一家三人の仲むつまじいご様子に私たちは親しんだ。あのときのあどけない小学生がいまでは研究者となり、お父様との貴重な思い出を書いてくださった。侑美さんには富山先生の略歴・著作目録も編んでいただいた。

富山先生と「生れたときから、ずっと同期」の戸部学長と、富山先生の授

業の一つを引き継がれた高名教授は、それぞれの立場からしか書けない文章を寄せられた。有田教授は、一仏文学徒と断りつつ、富山先生のご研究の出発点であるカフカについての論稿を寄せられた。村瀬教授と陶久准教授はそれぞれ独特の視点から生と死に思いを巡らし、哀惜の念を哲学者らしく表現された。

本号には、ほかに北山名誉教授による仏文の映画論、時田准教授のハイน์リヒとメスメリズムについての論考、中野教授によるベンヤミン・ツィーマン教授講演の翻訳が寄せられた。追悼の文章ではないが、本号への寄稿そのものが追悼の意味を持つだろう。そして、本号の全ての論稿を富山先生に捧げる。

富山先生、ありがとうございました。

2021年3月

末永朱胤